資料１０　説教6「恵みの手段」

「あなたがたは、わたしのおきてを離れ、それを守らなかった」。　(マラキ書３章７節)

一

しかし、いのちと不死が福音によって、明るみに出されたのですから、もはやどのような「おきて」(ordinances)が存在するというのでしょうか。キリスト教の時代にあって、恵みが注がれる通常の管として、神によって定められたどのような「手段」(means)が存在するというのでしょうか。初代教会では、こうした質問は、公然と自分自身を異教徒と認めている人でなければ決して提出できなかったものです。クリスチャン全体は、キリストがご自身の恵みを人々のたましいに伝えるために特定の外的な手段を定められたことに同意しています。彼らがその手段を絶えず実践していた事実が、その問題を議論の余地のないものにしました。「信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にして」(使徒２章３節)いる間は、「彼らは使徒たちの教えを堅く守りへパンを裂き、祈りをしていた」(使徒２章４２節参)とあるとおりです。

2　しかし、時がたつにつれ「多くの人たちの愛は冷たくなり」(マタ２４章１２節)ある人たちは手段を目的と間違うようになり、そして宗教を、神の似姿へと更新される心より、むしろそれらの外的なわざを行うこととするようになりました。彼らは、すべての「命令」が、「きよい心と偽りのない信仰とから出て来る愛を目標としている」(Iテモ１章５節参)のであと心を尽くして彼らの神である主を愛し、また自分自身のように隣人を愛するということを忘れてしまいました。また、「神の力を信じる信仰」(コロ２章１２節)によって、プライド・怒り・悪しき願望などからきよくされることなどが目標であることを忘れてしまいました。またへ宗教は原則的にこれらの外面的な手段によって成り立ってはいないが、それでもそれらの手段のうちに神が喜ぶ何かがあるのではないかと想像した人々もいたようです。彼らは、律法のより重要なもの、神の正義・憐れみ壷において、厳格であったとは言えませんが、それでも彼らを神の目に受け入れられるものとする何かがあると想像したようです。

3　そのように、手段を乱用した人々には、それらの手段が、その定められた目的に貢献しなかったことは明らかです。むしろ、健康のためであるべきものが,つまずきのきっかけとなりました。彼らは、そのうちにある祝福を受けるどころか、ただ自分たちの頭の上にのろいを招いただけでした。

心と生活において天の御国にふさわしくさらに成長するどころか、以前にも倍して地獄の子となってしまいました。そのような悪魔の子たちに対して、これらの手段が神の恵みを伝達しないことにはっきりと気づいた他の人々は、この特殊なケースから、「それらは神の恵みを伝達する手段ではない」という一般的な結論を導き出すようになりました。

4しかしながら､神のおきてを乱用した人々の数もそれらを軽蔑した人々の数よりもはるかに多数あったことは事実です。しかしここで、次のように考える人々が出てきたのです。

その人たちとはすばらしい理解力(時として、それは少なからぬ学識と結合していました)を持っていたというだけでなく同時に愛の人であり、体験的に其の内的な宗教に通じていた人たちのようです。その幾人かは、その時代の人々に良く知られた燃えて輝くともしびでした。また、あふれる不敬度に対して、その破れ口に立ちふさがったことのゆえに、キリストの教会から称賛を受けるにふさわしい人々でした。

これらの聖なる貴い人々は、当初、うわべだけで心の伴わない宗教は何の価値もないことを示すことに終始していたのだと思われます。つまり、「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければならない」(ヨハ５章２４節参)わけですから、外的な目に見えるかたちでの礼拝は、心が神に捧げられていないならば徒労にすぎません。ですから、外的な神の命令は、内的なホ-リネスを前進させるときには大いに益となりますが、もしそれを前進させないときには、無益で空虚なものですし、空なるものよりも軽いものです。それどころか、それらが、いわば、その代わりとして用いられるなら、主にとって全くいまわしいものとなります。

5　そこで、そうした人々のうちの幾人人かが、外的宗教が全く無であるかのように、またそれがキリスト教の中に何らの位置も有していないかのように語ったとしても、不思議ではありません。神の定めに対するあの恐ろしい冒涜が教会全体に広がって、この世から真の宗教をほぼ追い出してしまっていると彼らは強く確信し、神の栄光に対する強烈な熱心とたましいをあの致命的な錯覚から回復させようとの願いから語っているのです。もし彼らが、常に十分な注意を払いつつ自分たちの意見を述べたのではなかったとしても、少しも驚くことではありません。その結果として、不注意な聴衆は、あたかも彼らがすべての外的手段を一括して無益なものとしへまた神の恵みを人のたましいに伝えるための通常の管として神が意図されたものではない、と非難していると信じたのかもしれません。

それどころか、それらの聖なる人々の中の幾人かが、ついにはこの意見に陥ってしまったということも、あり得ないことではありません。特に自分からではなく神の摂理によってすべての神の定めから切り放された―多分、あちこちと放浪していたり、一定の住まいを持たず、あるいは地の穴や洞窟に住んだりしていたことにより―人々が、そうなったことでしょう。これらの人々は、すべての外的手段なしに神の恵みを経験したので、同じ恵みが、故意にそれらの外的な手段を絶っている人々にも与えられると推測したということもあり得るでしょう。

6　このような考えがどんなに筒単に広がって行き、人々の心の中に徐々に入り込んで行くかは経験としてわかります。特に、たましいの死の眠りから完全に醒まされ、自分たちの罪の重荷が重すぎて担いきれないものとして自覚し始めた人々の心の中に入-込んで行きます。これらの人々は、一般的に、自分たちの現状に対して我慢できず、そこから逃れるためにあらゆることを試みる人々です。

いつでも何か楽にしてくれたり幸せにしてくれるような新しいものや新しい提案があると、すぐに飛びつく人々です。彼らは多分、ほとんどの外的な手段をすでに試したことが

あり、その結果自分たちのうちにやすらぎを兄いださなかったのです。むしろ見いだしたのは、一層の自責の念や恐れ、また悲しみと断罪だったのでしょう。ですから、これらの人々に、それらすべての手段を絶つ方が良いと説得するのは容易なことです。彼らはすでに、空しく、そのように思えるのですが、努力することに疲れ、火の中で焼かれるために労することに疲れているのです。ですから、彼らのたましいにとって少しの喜びもないものを投げ出す実や、苦痛に満ちた努力をやめ、そして怠惰な無活動の中に沈み込んでいく実があれば、どんなものでも喜ぶでしょう。

二

1　以下の論説において'私は、恵みの手段(means　of　grace)というものがあるのかないのか、詳細に調べてみようと思います。

(恵みの手段)は神によって定められた外的なしるし(signs)言葉・行為であり、この目的のために神が先行的な恵み、義認や聖化の恵み(grace)を人に伝達する通例の管となるように定められたものと私は理解しています。

私は、この(恵みの手段〉という表現を用います。なぜなら、それ以上のものを知りませんし、長年にわたってキリスト教会において一般的に用いられてきたからです。特に'私たち自身の英国教会によって用いられ、そして「恵みの手段と栄光の望み」(英国国教会『祈祷書』感謝一般の項)の両方のゆえに神を崇めるように私たちを指導し、また聖礼典(a sacrament)は「目に見えない内なる恵みの目に見える外的なしるしであり、またそれによって私たちがその恵みを受ける手段です」(『同書』教会問答)と教えています。

これらの手段の主要なものは以下のようです。まず、祈りです。隠れた所での祈りも大会衆とともにささげられる祈りも同じです。次に、聖書の探求へこれには、読むこと、聞くこと、そして黙想することも含まれています。また、聖餐式にあずかること、つまり主を覚えてパンを食しぶどう液を飲むことです。これらは、人のたましいに神の恵みを伝えるための、通常の管として神が定められたものと私たちは信じています。

2　しかし私たちは'手段の価値のすべては宗教の目的に実際的に役立つかどうかにかかっていることを認めます。つまり結果として、これらのすべての手段は、目的から外れたときには無よりも劣るものですし、空しいものです。また、もしそれらが実際的に神の知識と愛へと私たちを導かないとしたら、それらは神の目に受け入れられないものです。それどころか、それらは神の前に嫌悪され、神の鼻に悪臭を放つものとなります。特に、もし、それらが役立つように意図された宗教用の「減刑」(commutation)の一種として用いられるならば、神はそれらを担うのに疲れ果てておられます。そのように、神の腕を神ご自身に敵対させ、また本来は心にキリスト教信仰をもたらすために定められたその手段によって、逆に信仰を心から閉め出すとは、なんと愚かで邪悪なことでしょう。

3　また、すべての外的な手段は何であれ、もし神の御霊から離れているなら、それは全く益をもたらすことができず、少しも神の知識や愛をもたらすことはできないと認めます。議論の余地のないことですが、どのような助けであれ、地上に注がれる助けは、神ご自身

がなされるのです。ご自身の全能の力によって、神の目に喜ばれることを私たちのうちになされる方は、神だけです。すべての外的なものは、神がそれらのうちに働き'神がそれらのものを用いて業をなすのでなければ、単に弱々しく卑しい要素にすぎません。ですから、どのような厳であれ、その中に何らかのそれ自体の持つ固有な力があると思っている人はだれでも、聖書も神の力も知らずに、大いに思い違いをしているのです。祈りにおいて語られる言葉そのものや、読まれる聖書の文字'あるいは聖餐式に受けるパンとぶどう酒などには、そのものに固有の力があるわけではありません。ただ神だけがあらゆる良き賜物の与え主であり、すべての恵みの創始者です。そして、すべての力は神のものであり、それによってのみ、どのような外的手段であれ、それらを通して私たちのたましいに様々な祝福が注がれるのです。

同様に、もしこの地上に何等かの手段というものがなかったとしても、神は同じ恵みを与えることができるということを私たちは知っています。その意味において、神に関して言えば、手段というようなものは無いと断言してもよいでしょう。神は、どのような手段を通しても、あるいは全く手段がなかったとしても、ご自身を喜ばせることはどのようなことでも同じ様に行うことができるという点からすると、そう言うことができます。

4　私たちはさらに、どのような手段を用いたとしても'一つの罪さえ決して購うことはできないと認めます。どのような罪人であれ、神と和解され得るのは、キリストの血潮による以外ありません。

私たちの罪のためのなだめの供え物はほかにありません。罪と汚れのための泉も、ほかにはありません。キリストにあるすべての信仰者は'キリストにある以外、何の功績もないことを深-確信しています。また、自分自身のどのような働きにも何の功績がないこと、また祈りを口に出して捧げること、聖書を探求すること、神の言葉を聞くこと、聖餐のパンを食しコップから飲むことなどにも、何の功績もないことを探-確信しています。ですから、誰かが使ってきた「キリストだけが唯一の恵みの手段です」　(『日誌』　1740.4.25)という表現によって、次のこと、つまり、キリストだけが恵みの功績をもたらす根拠　(meritorious cause)である、ということだけが意図されているなら、それは神の恵みを知っている人ならだれも反論できません。

5　しかしもう一度申し上げます。私たちは、クリスチャンと呼ばれている人たちの中の大部分が、今日まで、恵みの手段を乱用し、結果として自分たちのたましいを破滅させている憂鬱な事実ではありますが)ということを認めます。これは、形だけで力の無い敬虔で満足しへ安んじているすべての人々の場合でも同じであることは、疑いありません。彼らは、自分たちの心にキリストが1度も啓示されず'また神の愛が心のすみずみまで注がれていないにもかかわらず、あれとかこれとかをしていることの故に、自分たちがすでにクリスチャンであるとあさはかにも思いこんでいるか、そうでなければ、それらの手段を用いているというはかない根拠のゆえに、間違いなくそうに違いないと考えているかのいずれかです。そして、彼らは、(多分ほとんど意識してはいないでしょうが)それらの中にある種の

力があり、それによってやがて　(彼ら自身はいつかは知らないのですが)聖とされるに違いないと、愚かにも夢見ているか、それとも、それらの手段を用いること自体の中に、何らかの功績があり、それが彼らにホーリネスを与えるよう、あるいはホーリネスなしに彼らを受け入れるよう、きっと神を動かすと愚かにも夢見ているのです。

6　彼らは、「恵みによって救われたのです」　(エペ２章５節参)というキリスト教という建物全体の大きな土台を、ほとんど何も理解していません。あなたがたが罪や罪責と罪の力から救われ、また神の好意と似姿へと回復されるのは、いかなる働きや功績によるのでもなく、またあなた自身に何らかの値するものがあることによるのではありません。それは、無代価の恵み、つまり神の愛する御子の功績により、ただ神の憐れみによるのです。あなたがたは、このように、あなたがたの中にある力・知恵・強さによるのではなく、ただすべての人の中にあってすべての働きを行われる聖霊の恵みと力によって救われるのです。

7　まだ中心的な疑問が残ります。私たちは、この救いが神からの賜物であり、神のわざであることを知っています。しかし、どのようにして(自分がそれを獲得していないと確信している人は言うでしょう)私はそれを獲得するのでしょうか。もし、あなたが「信じなさい。そうすれば救われます」(使徒１６章３１節参)と言うなら、その人は「その通りです。でも、私はどのようにして信じるのでしょうか」と答えます。あなたが、「神を待ち望みなさい」と答えます。「そうですか。でも私はどのようにして待ったらよいのですか。恵みの手段によってですか、それともそれなしにですか。救いをもたらす神の恵みを、それらの手段によって待つのですか、それともそれらを捨てて待つのですか」。

8　神のことばが、そのような大切な点に関して、何の指さしも与えていないということは、考えられないことです。私たち人間のため、私たちの救いのために天から降って来られた神の御子が、私たちの救いと密接な関わりがある問題について、何も決定しないままに私たちを放置して行かれたということは、考えられません。

そして事実、主は私たちをそのような状態に放置して行かれたのではありません。主は、私たちが行くべき道を示しておかれました。私たちはただ、神のことばに相談し、そこに記されていることを探求すべきなのです。そして、もし私たちが、ただその決定に従うなら、疑問が残る余地はなくなります。

三

1　これによれば、つまり聖書の決定によれば、神の恵みを慕い求める人はだれでも、神が定められた手段によって恵みを待ち望むべきです。それを捨て去るのではなく、用いることによってです。

そして、第一に、神の恵みを願う者はすべて、祈りの道によって待ち望むべきです。これは、主ご自身の明白な指示です。主の山上の説教の中で、宗教が何から成り立っているかを詳細に説明し、その主要な部分を措写した後に、主は次のように付け加えています。

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たた-者には開かれます」(マタ７章７，８節)。ここで私たちは、求めるように、最も明白な方法で指示されています。それは、受けるため、受けるための手段として求めることです。また、高価な真珠である神の恵みを兄い出すために捜すよう、もし私たちが神の御国に入ろうとするならたたくよう、求め続け捜し続けるよう指示されています。

2　少しの疑いも残らないように、主はこの点に関して、さらに独特な論法で詳しく述べています。一人一人の心に主は次のように訴えています。「あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うときに、だれが蛇を与えるでしょう。してみると、あなたがたは'悪い者ではあっても自分の子どもには、良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父―御使いと人間の父であり、すべての肉なるものの霊の父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましょう」(マタ７章９～１１節参)。あるいは、別の機会に主ご自身が、すべての良いものを一つに含めて、「とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましょう」(ルカ１１章１３節)と述べています。ここで、特に注意しなければならないことは、求めるよう指示されている人たちとは、まだ聖霊を受けていない人たちということです。にもかかわらず、主は彼らにこの手段を用いるよう指示しています。そして'それは必ず効果があると約束しています。つまり、求めるとき、あわれみがご自身のすべてのみわざの上に行き渡っている方から、彼らは聖霊を受けるのです。

3　私たちが、どのような賜物であれ神から受けようとするならば、この手段を用いることは絶対的に必要です。そしてその必要性は'その直前に記されているあの有名なたとえによってさらに明らかになります。「また、イエスはこう言われた」(それは、どのように祈るべきかを教えておられた人々に対しての言葉です)、「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人の所に行き、『君。パンを三つ貸してくれ。』と言ったとします。すると彼は家の中からこう答えます。『めんどうをかけないでくれ。起きて、何かをやることはできない。』あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要なものを与えるでしょう。わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます」(ルカ１１章５節、７～９節)。「彼は友だちだからという理由で与えはしませんが、その執掬な求めのゆえに起きて、必要なだけあたえます」。私たちがこの手段によって、つまり執拗な求めによって、もしそうしなければ全-受けられないようなものを神から受けることができる、と聖なる主がこれ以上明白に宣言できたでしょうか。

4　この手段によって、何であれ神に求めるものを神から受けるまで'「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるため、主は彼らに別のたとえを話された。あ

る町に神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいてください。』と言っていた。彼は、しばらく敬い合わないでいたが、後には心ひそかに、冠は神を恐れず人を人とも思わないが、どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから,この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。』と言った」(ルカ１８章１―５節参)。このたとえの適用を、「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい」と主ご自身が述べておられます。このやもめが求め続け、拒絶されても引き下がらないので、それで裁判をしてやろう、というのです。「まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないことがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます」(ルカ7１８章７，８節)し彼らが「祈り、失望しないなら」(ルカ１８章１節参)の話ですが。

5　私たちが隠れた所での祈りによって神の祝福を待ち望むようにとの､同様に詳細で明白な主の指示があります。そこでは、その手段によって私たちの唇の求めを手にすることができるという積極的な約束も添えられています。それは、以下の有名なみことばです。「あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れ所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます」(マタ６章６節)。

6　もし､ほかにもっと明白な指示が可能であるとするなら､それは使徒を通して神が私たちに与えた指示です。それは、公的・私的にかかわらず、すべての祈りとそれに添えられた視福に関する指示です。「あなたがたの中に、知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます」(ヤコ１章２節)もし求めるならばの話です。そうでないと「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです」(ヤコ４章２節)ということになります。

しかし次のような反論もあるかもしれません。「これは神の放しの恵みを知らない未信者に対する指示ではありません。なぜなら、使徒は、『ただし、信じて(英訳、信仰で)願いなさい』そうでないと、『そういう人は、主から何かをいただけると思ってはなりません。(同１章６，７節7参)と付け加えているからです」。それに対して、私は次のように答えます。この箇所での「信仰」という語の意味は、使徒自身によって(あたかも、この反論を未然に防ぐため、意図されていたかのように)すぐそれに続く言葉の中で限定されています。それは、「少しも疑わず(英訳、揺れ動かず)、信じて(英訳、信仰で)願いなさい」、つまり、何も疑わないνεδεν διαλςινομενοσ 神が祈りを聞いていてくださるということや､心の願いをかなえてくださるということ、などを疑わないという意味です。

その箇所での「信仰」を、正規のキリスト教的な意味で理解すべきと考えることが、著しくかつ冒涜的に不合理であることは,以下のことから明らかです。その立場は、自分ではこの信仰(ここでは「知恵」と呼ばれています)を持っていないと自覚している人に、それを神

に求めるよう聖霊が指示するということを仮定しています。しかも、「きっと与えられます」(ヤコ１章５節)という積極的な約束とともに神への求めが勧められていることになり、そのすぐ後に付け加えて、もし彼がそれを求める以前にそれを持っていないならば、それは与えられない、と述べることになります。しかし、だれがそのような仮説に耐えられるでしょうか。ですから、これまでに引用された聖句と同様、この聖句から私たちは、神の恵みを求める者はすべて,それを祈りの道で待ち望まなければならないと推論すべきです。

7　第二に、神の恵みを求める者はすべて、(聖書の探求〉によって待ち望まなければなりません。

この手段の使用に関する主の指示は、同様に平易で明白です。主は、信じようとしないユダヤ人たちに、「聖書を調べなさい。というのは、その聖書が、わたしについて証言しているのです」　(ヨハ５章３９節参)と語っています。そして、彼らが主を信じるというその目的のために、主は彼らに聖書を探求するよう指示されたのです。

これは命令ではなく、彼らが「聖書を調べた」との主張に過ぎないという反論は恥知らずなほどに誤っています。ここにあるΕρενυνατε τασ γραφασ　(聖書を調べよ)という表現が命令形なのですから、これが命令でなくていったい何なのでしょう。それは、非常に多くの語を用いて表現すると同じくらい、決定的なものです。

そして、どんなにすばらしい祝福がこの手段を用いることに伴うかということは、ベレアの人々に関して記されているところから明らかです。彼らは、パウロから聞いた後で、「はたしてそのとおりかどうか毎日聖書を調べた。そのため、彼らのうちの多くの者が信仰に入った。」（使徒１７章１１節）。

実のところ、「非常に熱心にみことばを聞いた」(使徒１７章１１節)人々の中には、「信仰が(同じパウロが述べているように)聞くことにより来た」　(ロマ１０章１７節参)のであって、聖書を読むことによって、すでに聞くことによって与えられた信仰が確立されたに過ぎなかった、というケースもあったことでしょう。しかし、「聖書を探求する」という一般的な用語の意味として、聞くこと・読むこと・思いめぐらすことなどが含まれるということは、すでに考察されたことです。

8　そして「幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです」　(Ⅱテモ３章１節～５節)という、テモテに対するパウロの言葉から、これは神が真の知恵を単に与えるためだけの手段ではなく、それを確立し増し加える手段でもあるということがわかります。同じ真理(すなわち、これは神のさまざまな恵みを人に伝えるために、ご自身で定められた偉大な手段であるということ)が、すぐ後に続く言葉の中に、最も十全な仕方で述べられています。「聖書はすべて、神の霊感によるもので」(結果として、すべての聖書が誤りなく真実です)、「教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が,すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです」(Ⅱテモ３章１６－１７節)

9これは、第表的直接的には、テモテが「幼いころから親しんできた」聖書に関して語られていることであり、それは旧約聖書のことに違いありません。なぜなら、その当時にはまだ新約聖書は書かれていなかったからです。ということは、パウロ(もちろん彼は、「あの大使徒たちに少しも劣ってはいない」（Ⅱコリ１１章５節）ので、現在地上にあるだれよりも劣っていることはない、と私は考えます)は、旧約聖書を軽視するという立場から、何とかけ離れていたことでしょう。神のことばの半分を重要視していないあなたがたよ、この事実を見てください。あなたがたが、ある日「驚き、そして滅びる」(使徒３章)ということにならないためです。そして、その半分に関して、聖霊は明らかに神が定めた手段として「有益」であると述べているのです。それは,「教えと戒めと矯正と義の訓練とのため」に神が定めた手段です。「神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となる」ためにです。

10また、これは神の人、つまりすでに神の御顔の光の中を歩いている人にだけ有益なのではありません。まだ暗やみの中にいて、まだ知らない方である神を探し求めている人々にとっても有益です。

ですから、ペテロは、「また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています」(Ⅱペテ１章１９節)と述べています。これは、文字通りには、「そして、私たちはいっそう確かなものとされた預言のみことばを持っています」ということです.私たちが「キリストの威光の目撃者」で、「おごそかな、栄光の神から来た御声を聞いた」(ＩＩペテ１章１６～１７節)ことにより、いっそう確かなものとして確認されたのです。また、「夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまで、暗いところを照らすともしびとして、それ(預言のみことば、そのようにペテロは聖書を呼んでいます)に目を留めているとよいのです」(Ⅱペテ一1 9)と述べています。ですから、心の中にその日が夜明けとなるよう望んでいる人はすべて、「聖書を探求しつつ」待ち望もうではありませんか。

11第三に、神の恵みが増し加わるように望んでいる都はすべて、主の聖餐にあずかることによってそれを待ち望むべきです。なぜなら、これもまた、主ご自身が与えられた指示だからです。「主イエスは、渡される夜、パンを取り、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだ(つまり、わたしのからだの聖なるしるし)です。わたしを覚えて、これを行いなさい。杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血(その契約の聖なるしるし)による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」(Iコリ１１章２３―２６節参)。つまり、あなたがたは、これらの目に見えるしるLによって、神の御前に、また御使いと人の前に、同じことを公に示すのです。主が天の雲にうちにあって来られるまで、あなたがたが厳粛に主の死を覚えていることを明らかにするのです。

ただ、「一人一人が(まず)自分自身を吟味しなさい」。この聖なる定めの性質と意図を理解しているかどうか、また主の死と同じになることを真に願っているかどうか吟味し、「そ

のうえで(何ら疑問がないなら)パンを食べ、杯を飲みなさい」(Ｉコリ１１章２８節参照)。
ここでも、パウロは、はじめ主によって与えられた指示を明白に繰り返しているのです。「食べなさい」「飲みなさい」両方とも,命令形です)という言葉は、単に許可だけを意味しているのではなく、はっきりとした明確な命令の言葉です。その命令は、信仰によってすでに平安と喜びで満たされている人たちにも、あるいは「私たちの罪の記憶は,私たちを悲しませます。その重荷に耐え得ません」(英国国教会『祈祷書』聖餐式の項)と真実告白できる人にも与えられています。

12そして、これが神の恵みを受けるための通常の定められた手段であるということは、その前の章に出てくるパウロの次の言葉から明らかです。「私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかる(communion)こと、あるいは、キリストの血の恵みを伝授すること(communication)ではありませんか。私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか」(Iコリ１０章１６節)　パンを食し、そして杯を飲むことは、目に見える外的な手段ではないのでしょうか。その手段によって、神は私たちのたましいに、すべての霊的な祝福、つまり義と平安と聖霊にある喜びとを伝えられるのです。それらの視福は、私たちのためにキリストのからたが壷裂かれ、またキリストの血が一度流されたことによって、買い求められたものではありませんか。ですから'神の恵みを真実に求める者はすべて、そのパンを食し、その杯を飲もうではありませんか。

四

1　神はごく平易にご自身を見出し得る道を定められました。しかしそれに対して、自らを賢いとする人々からの折りある毎の反論は無数にあります。それらのうちのいくつかを考察することは、必要なことでしょう。それらの反論に重みがあるからではありません。それらが最近目立って、足の弱い人の歩みを道から外れさせるためにしばしば用いられてきたからです。それどころか、サタンが光の使いとして現れるまでは良く走っていた人たちを、悩ませ堕落させるために、そうした反論が用いられてきたからです。

反論のうち、第一で主要なものは、「あなたがたは、これらの手段そのものに信頼することなしには、その手段(あなたがたがそう言っているもの)を用いることはできません」というものです。お願いです、それが記されているのはどこか、教えてください。そのような主張を支える明白な聖句を挙げるべきです。そうでなければ、私はそのような主張を受け入れることはできません。なぜなら、あなたが神よりも賢いとは思わないからです。

もし、あなたが主張する通りであれば'キリストがそれを知っておられたに違いありません。そして、もし主が知っておられたら'主はきっと私たちに警告を与えておられたに違いありませんし、ずっと前にそれを啓示しておられたでしょう。主がそうされなかったのですから、またイエス・キリストの全啓示の中にもそのような記述が少しもないのですから私はキリストの啓示が神からのものであると確信すると同程度に、そのような反論が全-間違っていると確信します。

「しかしながら'あなたがそれらの手段そのものに信頼しているかどうかを確かめるため

に、しばらくの間それらから離れていてください」。つまり、'神に信頼しつつ、神に従っているかどうかを確認するために'私が神に不服従をすべきなのですか。そのような忠告をあなたがたは公言するのですか。

あなたがたは「善をもたらすために悪を行う」ということを意図的に教えるのですか。そのような教師に対する神の審判の宣告を恐れなさい。彼らは「当然罪に定められる」　(ロマ３章８節)のです。

「そういう意味ではなく、もしそれらの手段を中止したとき苦悩を覚えるなら、あなたがその手段そのものに信頼していたことが明白になります」。決してそういうことにはなりません。もし私が意図的に神に対して不服従を犯したとき苦悩を覚えるなら、それは御霊がまだ私と争っているということが明白なのです。しかし、もし私が意図的な罪を犯しながら苦悩を覚えないとしたら、それは私が堕落した心に身を任せていることになります。

しかし、「それらの手段そのものに信頼している」ということで、あなたがたは何を意味しているのですか。そのなかに神の祝福を求めることですか。もしその方法で待っていれば、ほかでは決して手に入れることができないものを手に入れることができると信じることですか。それなら、私はそのように信じています。また神が私の生涯の終わりに至るまで助けてくださるので'私はそのように信じて行くでしょう。神の恵みによって、私はそれらの手段を'私の死の日に至るまでへそのように信頼して行きます。つまり、神は約束されたことに対しては何でも真実であり、またその成就にも真実であると信じて行きます。また、神がこの方法を通して私を祝福すると約束されたのですから、神のみことばの通りになると私は信頼しています。

2第二に反論されてきたことは、「これは行いによって救いを求めることだ」ということです。あなたがたは、自分たちが使っている表現の意味を知っていますか。「行いによって救いを求める」とはどういう意味ですか。パウロの記したものの中では、それは、モーセの律法の儀式的な行為を守ることによって救われることを求めるということか、あるいは自分自身の働きのゆえに自分の義の功績によって救いを期待するということのいずれかを意味しています。しかし、そのどちらが、どのようにして、神が定められた方法で私が待つこと、そして神ご自身が約束されたゆえに神が私にそこで会ってくださると期待することを意味しているというのでしょう。

私は、神がご自身のみことばを成就されると期待しています。そして、神がこの方法で私に会ってくださり、祝福してくださると期待しています。しかし、それは私が行ってきたどんな行いのおかげでも'私の義の功績によるのでもありません。それはただ、神の御子の功績と苦難と愛によるのです。

その御子を、神は常に喜びとしておられます。

3　第三に、キリストが唯一の恵みの手段である、と猛烈に反論されてきました。これは単なる言葉の遊びに過ぎない、と私は答えます。あなたがたの用語を説明してください。そうすれば反論は消滅してしまいます。私たちが、「祈りが恵みの手段です」というとき、

それは神の恵みが伝えられる管として理解しています。あなたがたが、「キリストが恵みの手段です」というとき、それは、キリストこそが唯一の代価・買手と理解しているのです。あるいは、「わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」(ヨハ１４章６節)と理解しているのです。だれがそれを否定するでしょうか。しかしこれは全く質問から外れているのです。

４　しかし、第四に反論されてきたことですが、聖書は私たちに、救いを待ち望むよう教えていないのでしょうか。ダビデは、「私のたましいは黙って'ただ神を待ち望む。私の救いは神から来るからだ」(詩篇６２篇１節)と述べてはいないでしょうか。また、イザヤは、「主よ、わたしたちはあなたを待ち望みます」(イザ３３章２節)と述べ、同じことを私たちに教えていないでしょうか。私は、これらすべてを否定しません。救いは神の贈り物ですから、私たちは疑いもなく確実に、救いのために神を待ち望まなければなりません。しかし、どのようにして待つべきなのでしょうか。もし神ご自身が一つの方法を定められたとしたら'あなたは神を待ち望むためのそれ以上にすぐれた方法を見出すことができるでしょうか。しかし、神が一つの方法を定められたことは、詳細に明らかにされてきました。

また、その方法がどのような方法であるかも、明らかにされてきました。あなたがたが引用する預言者の言葉自体が、このことを疑問の余地のないものとしています。なぜなら、その全文が以下のようになっているからです。「主よ。まことにあなたのさばき(あるいは、定め)の道で、私たちはあなたを待ち望みました」(イザ２６章８節参)。そして、ダビデ自身の言葉が豊かに証ししているように、彼も全く同様の方法で待ち望みました。「私はあなたの救いを待ち望んでいます。主よ。私はあなたの仰せを行っています」(詩１１９篇１６６節)。「主よ。あなたのおきての道を私に教えてください。そうすれば、私はそれを終わりまで守りましょう」(同３３節)

５　「それはそうとして、しかし神は、『しっかり立って、主の救いを見なさい』(出エ１４章１３節参) という、別の方法も定められました」と言う人もいます。

そこで、あなたがたが引用している聖書を調べてみましょう。それらのうちの最初の文章は、その前後の関係から、次のようになります。「パロは近づいていた。それでイスラエル人が目を上げて見て非常に恐れた。・・・そしてモーセに言った。『エジプトには墓がないので'あなたは私たちを連れて来て、この荒野で、死なせるのですか。』・・・それでモーセは民に言った。『恐れてはいけない。しっかり立って、・・・主の救いを見なさい。主はモーセに仰せられた。『・・・イスラエル人に前進するように言え。あなたは、あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に差し伸ばし、海を分けて、イスラエル人が海の真中のかわいた地を進み行くようにせよ。」」(出工１４章１０～１１節、１３節、１５～１６節参)

これが、かれらが「しっかり(静かに)立って」見た「神の救い」でした。しかも、全力を尽くして「前進すること」によって見ることができた神の救いでした。

同じことが表現されている別の聖書の箇所は、次のようになっています。

「そこで、人々は来て、ヨシャパテに告げて言った。海の向こう・・・からおびただしい大軍があなたに向かって攻めて来ました。」ヨシャパテは恐れてただひたすら主に求めへユダ全国に断食を布告した。ユダの人々は集まって来て、主の助けを求めた。すなわち、ユダのすべての町々から人々が出て来て'主を求めた。ヨシャパテは、主の宮・・で、・・集団の中に立った。・・ときに主の霊がヤハジェルの上に臨んだ。・・・彼は言った。あなたがたはこのおびただしい大軍のゆえに恐れてはならない。・・・この戦いはあなたがたの戦いではなく、神の戦いであるから。あす'彼らのところに攻め下れ。・・・この戦いはあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。

主の救いを見よ。・・・主はあなたがたとともにいる。こうして彼らは翌朝早く出陣した。・・・彼らが喜びの声、賛美の声をあげ始めたとき、主は伏兵を設けて、ユダに攻めて来たアモン人、モアブ人、セイル山の人々を襲わせたので、・・・互いに力を出して滅ぼし合った」(ＩＩ歴代誌２０章２～５節、１４節～１７節、２２～２３節)。

これが、ユダの人々が見た救いでした。しかし、これらすべてのことがどのようにして、神が定められた手段において、私たちは神の恵みを待つべきではないということを立証するのでしょうか。

6　もう一つだけ反論に触れようと思います。その反論は、正確にはこの項目には属さないものです。にもかかわらず、あまりにも頻繁に主張されてきたので、決して見過ごすことはできません。

「パウロは、『もしあなたがたが、キリストとともに死んだのなら、どうして定め(ordinance)に縛られるのですか』（コロサイ２章２０、２１節参照）と述べているではありませんか。ですから、クリスチャンはキリストとともに死んだ者なのですから、もはや定めを用いる必要がないのです」。

つまり、あなたは、「もし私がクリスチャンなら,キリストの定めに従う必要がない」と言っているのです.この主張の不合理さから、一見してそこで述べられている定めがキリストの定めであるはずがない、とわかるはずです。それらの定めとはユダヤ教の定めのことで、その定めに対してはクリスチャンは、もはや従う必要がないことは確かなことです。

そして、同様のことが、すぐ次に続く言葉から明らかです。「すがるな。味わうな。さわるな」(コロ２章２１節)　すべて明らかにユダヤ教の律法の昔の定めに関するものです。

ですから、この反論は、すべての反論の中で最も薄弱なものです。そして、あらゆる反論にもかかわらず、偉大な真理は、微動だにしないで確立するはずです。神の恵みを望む人はすべて、神が定められた手段においてそれを待ち望むべきです。

五

1　しかし、神の恵みを望む人はすべて、神が定められた手段においてそれを待ち望むべきである、と認めたとして、依然としてどのようにしてその手段を嫡いるか、それを用いる順序と方法の両方について、質問があることでしょう。

前者に関しては、これらの手段を用いて、罪人が救いに導かれるとき、質的に神ご自身が

好まれるある種の順序があることが観察されます。愚かで無感覚で哀れな者は、自分勝手な道を進み、神のことなど自分の考えの中には全くありません.そのような時、神が不意に(つまり、先行的に)彼のところにやって来られます。多分、良心の覚醒もたらすような説教や会話を通したり、あるいは何らかの恐ろしい摂理によって。あるいは、這外的な手段によらないで、罪を悟らせる神の御霊の直接的な働きによるかもしれません。結果として、やがて来る怒りから逃れたいとの願望が与えられ、その罪人は、どのようにして逃れられるかを聞こうと、意識的に出かけていきます。もし彼が、心に語りかける説教者を見つけたら、彼は驚き、そしてこれらのことが葺にその通りかどうか、「聖書を調べること」(ヨハ５章３９節)を始めます。彼が聞いたり読んだりすればするほど、彼は自分が罪人であることを確信します。そして、ますます昼も夜もみことばを黙想するようになります。多分、彼が聖書で聞いたり読んだりしたことを、より良く説明したり納得させたりしてくれるような本を、他にいくらか見つけることでしょう。そして、これらすべての手段によって、認罪の矢が、彼のたましいにより深-食い込んでいきます。彼はまた、神に関することを語り始めます。それは、彼の思考の中では'常に最高の地位を占めるものです。それどころか、彼は神と語り、祈り始めます。もっとも、恐れと恥とによって、彼は何を言ったらよいのかほとんど分からないのですが。しかし、彼が声に出して話すことができるか否かにかかわらず'彼は祈らないわけにはいきません。たとえ'それが単に、「言いようもない深いうめき」　(ロマ８章２６節参)であったとしても。「いと高くあがめられ、永遠の住まいに住む方」　(イザ５７章１５節)が、彼のような罪人に心を留めてくださるかどうか疑問であったとしても、彼は、「大会衆の中で」　(詩篇２２篇２５節　他)神を知っている人々、忠実な人々とともに祈りたいと願います。しかし、ここで彼は、他の人々が「主の食卓」　(マラ１章７、１２節)に進み出ていくのに気がつきます。彼は、キリストが「これを行いなさい」　(Ｉコリ１１章２４節)と語られたことを考えます。私がしないのは、どうしてだろうか。私があま-にも重大な罪人だからなのか。私はふさわしくないのか。資格がないのか。しばらくの間'このような疑念と戦った後、彼はそれを打破します。このようにして彼は、開き、読み、黙想Lt祈り、主の聖餐にあずかるという神の道を歩み続け、とうとう神は御心にかなう方法で、彼の心に「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい」　(ルカ７章５０節)と語りかけられるのです。

２　こうした神の順序を観察することによって'私たちはある特定のたましいに対してどのようなとしたら、それは多分、聞くことか会話でしょう。ですから、そのような人に対して、もしその人が多少なりとも救いについて号音いるなら、私たちはこれらの手段を用いることを勧めるでしょう。

自分の罪の重さを感じ始めている人に対しては、単に神のことばを聞くだけでな-、それを読むことも－他のまじめな書物を合わせて読むことも-より深い認罪への手段となるでしょう。彼が読んだものを黙想するようにアドバイスすることもできるでしょう。そうすれば、読んだものが彼の心に十分な力を及ぼすでしょう。それどころか、特に同じ小道を歩いて

いる人々同士で、それについて恥ずかしがらずに語ることを勧めてもよいでしょう。苦悩と憂いとが彼をとらえるとき、その時こそ、彼に心を神の御前に注ぎ出すよう、熱心に勧めるべきで速「いつでも祈るべきであり、失望してはならない」(ルカ１８章１節)ことを。そして'彼自身の祈りが価値ないものと感じるときには、あなたは神とともに働いて、彼に「主の家」(詩篇１２２篇１節、他)に進み行き、神を恐れるすべての人とともに祈ることを思い起こさせるべきです。彼がそのようにするなら、主の死に際してのことば「わたしを覚えてこれを行いなさい」（Ｉコリ１１章２４－２６節参)がすぐに彼の記憶によみがえってくるでしょう。そうなれば、私たちは聖霊が働いておられるという彼の思いを励ましてあげるべきなのです。そして、そのようにして、神が定められたすべての手段を用いて,哀哀彼を導-ことができるのです。私たち自身の意志によるのではなく、ただ神の摂理と御霊が先に進んで道を開くにつれて、導いていくのです。

３　けれども､守るべきある特定の順序に関する命令を聖書の中に見いだすことができないように、神の摂理や御霊は、特定の順序に固執しないで、いろいろと変化します。そして、さまざまな人々が導かれる手段や神の祝福を見出す手段は、それぞれ異なり、無数に異なった方法で順序が入れ替わり、組み合わされます。それでも、依然として私たちの知恵は、神の摂理と神の御霊の導きに従うべきです。また、この点で(特に私たち自身が神の恵みを探し求めるところの手段についてはそうですが)、私たちは神の外的な摂理によって導かれるべきです。ある時には1つの手段を'そして別の時には別の手段を用いるというように。また、私たちは経験によっても導かれます。神の自由な御霊は私たちの経験を通して、私たちの心に働くことを、１番の喜びとされるのです。その間、神の救いをうめき求めているすべての人のための、確実で一般的な法則はこれです。機会が与えられるときはいつでも、神が定められたあらゆる手段を用いることです。なぜなら、あなたに救いをもたらす恵みを携えて神があなたに出会ってくださる手段を特定することはできないからです。

４　恵みの手段を用いる方法に関して述べておきます｡それを用いる人に果たして恵みが伝達されるかどうかは、すべてその方法にかかっています。第1に、神がすべての手段を越えた方であるという新鮮な意識を常に保つことです。全能者に制限を加えてしまうことのないように注意を払いなさい。

神は、どのようなことでも、いつでも御自身のみこころにかなうことを行われます。神は、ご自身が命じられたいかなる手段を通しても通さなくても、いずれにしてもご自身の恵みを伝えることができます。実際にそうされることもあります。「だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか」(ロマ１１章３４節)ですから、毎瞬間、神の現れに目を覚ましていましょう。神の現れの時が、あなたが神の定めに従事しているときであろうが、あるいは、その前、その後であろうが、それを用いることが妨げられているときであろうが、ともかく毎瞬間です。あなたが妨げられているときであっても、神は妨げられることはありません。神はいつでも備えておられ、いつでも可能であり、いつでも救おうと望んでおられます。「その方は主だ。主がみこころにかなうこ

とをなさいますように」　(Iサム３章１８節)。

第二に、どのような手段を用いるにしても、その前に、この手段そのものには力がない、ということをあなたの心に深く銘記させなさい。それ自体は、つまらない、いのちのない'空しいものにすぎません。神から離れたなら、それは枯れ葉や影にすぎません。また、それを私が用いるということの中にも、何の功績もありませんし、それを用いること自体が神を喜ばせるわけではありません。それによって私が神の手から何らかの好意を受けるに値するようなものになるわけではありません。私の舌を冷やす一滴の水さえ、値しないのです。しかし、神が命じておられるという理由から、私は実行するのです。この方法で神を待ち望むように神が指示しておられるので、私は神の無代価のあわれみをここで待っているのです。そこから、私の救いがやって来ます。

次のことをしっかりとあなたの心に据えなさい。儀式を守ることそれ自体(opus operatum)単なる働きは、何の益ももたらさないことです。また、神の御霊以外には、どこにも救う力がありません。

キリストの血潮以外にはいかなる功績もあ-ません。さらに、結果として、たとえ神が定められたものであってももしあなたが神のみに信頼していなかったとしたら、たましいに恵みを伝えることはできません。他方、神を真実に信頼する人は、たとえ彼があらゆる外的な定めから切-離されたとしても、たとえ地球の中心に閉じこめられたとしても、神の恵みに達しないということはありません。

第三に、すべての手段を用いる際、神のみを求めなさい。あらゆる外的手段の中に、またそれを通して、ただ御霊の力と御子の功績だけを追い求めなさい。その行い自体に固執しないように気をつけなさい。もしそうなると、それはすべて徒労に終わります。神に達しないものは,あなたのたましいを満足させることができません。ですから、すべてにおいて、すべてを通して、そしてすべてに勝って、神をひたすら見つめなさい。

また、すべての手段を、手段として用いることを忘れないようにしなさい。それらが'手段自体のためではなく、あなたのたましいを義と真のホ-リネスに刷新するために定められたということを忘れないことです。ですから、もしそれらがこのことに役立つなら,結構です。もしそうでないならそれらは意味もないはずです。

最後に、あなたがそれらの手段のいずれかを用いた後で、それを用いている自分自身をどのように評価しているかに気をつけなさい。あなたが何か偉大なことを成し遂げたかのように喜んでいるとしたら,警戒しなさい。もしそのように-しているなら,すべてのものを毒に変えてしまいます。「もし、神がそこにおられなかったとしたら、これは何の役に立つのでしょうか。罪に罪を加えていたのではないでしょうか。いつまででしょうか、主よ。救って-ださい。そうでないと'私は滅びてしまいます。この罪を私に負わせないで-ださい」と、考えるべきです。もし神がそこにおられたなら、もし神の愛があなたの心にあふれていたなら、あなたは、いわば外的な行いそのものには、気にも留めなかったことでしょう。神がすべてにおいてすべてであることを、あなたは見、知り、感じます。

へりくだりなさい。御前にくずおれなさい。神にすべての賞賛を捧げなさい。「すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられる」（Ｉペテロ４章１１節）ようにしなさい。「私は、主の恵みを、とこしえに歌います。あなたの真実を代々限りなく私の口で知らせます」（詩編８９篇１節）と、「あなたのすべての骨に叫ばせ（詩編３５篇１０節」なさい。